

氏名	田中 怜		
学位の種類	博士（教育学）		
学位記番号	博甲第 9507 号		
学位授与年月	令和 2 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	1970 年代以降のドイツにおける改革教育的な学校改革と授業実践 ——学校と生活の接続問題をめぐる授業の構成理論——		
主査	筑波大学教授	博士（教育学）	樋口 直宏
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	吉田 武男
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	藤田 晃之
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	濱田 博文

## 論文の内容の要旨

田中怜氏の博士学位論文は、1970 年代以降のドイツにおける改革教育的な学校改革とその中で取り組まれた授業実践を検討対象として、学校と生活の接続を果たす授業の構成理論を明らかにしたものである。その要旨は、以下の通りである。

本論文は三部構成をとっており、第一部では、1970 年代の西ドイツにおける反権威主義的な学校・授業改革の理論と実践について論じている。第二部では、1980 年代の改革教育的な取り組みやそれに対する批判の言説を検討対象に据えることで、学校と生活を接続させる試みの成果と課題を明らかにしている。第三部では、1990 年代以降の東西統一後の旧東ドイツ地域を対象にして、生活との差異を活かした授業構想である多視点的授業に着目し、その実践事例の検討と理論モデルの提示を行っている。

序章で著者は、本論文の研究背景として古くて新しい学校と生活の接続問題をめぐる教育改革の動向を踏まえ、両者の関係性を空間と時間という 2 つの点から整理している。さらにそれぞれの点から、学校と生活の接続を検討するにあたり問われなくてはならない問題として、「現実の再提示問題」と「学習と行為の因果性問題」を導き出している。著者は、この 2 つの問題に回答を与える事例として、特に 1970 年代以降のドイツにおける改革教育的な学校改革と授業実践を検討対象に据え、先行研究の問題点を改革教育の是認的な評価という点から整理している。そして、改革教育的な諸実践の批判的な検証を踏まえ、学校と生活の接続問題に解を与え得る授業構成の理論を導き出すことを、本論文の目的として設定している。

第一部第一章で著者は、1970 年代の西ドイツで盛んとなった学校批判の言説を整理し、反権威主義的な学校改革を先導した事例として、ニーダーザクセン州ハノーファーのグロックゼー学校の理論と実践を明らかにしている。そこでは、当時の急進的な学校批判の言説が、脱学校論の視点から分析されており、そうした言説がオルタナティブな学校の創設運動に収斂していったことが指摘されている。その具体的な事例として、グロックゼー学校が取り上げられており、子どもの「自己調整」と「範例学習」の教授学的な原理に基づく授業事例が検討されている。第二章で著者は、その後のグロックゼー学校の改革過程をたどることにより、反権威主義的な学校と生活の接続方法の限界を指摘している。そこでは、学校改革のあり方をめぐる学校関係者間の対立により、学校創設期に展開されていた授業の革新性が

徐々に損なわれていく経緯が明らかにされている。

第二部第三章で著者は、1980年代の改革教育的な授業改革を草の根的に推進した「実践的学習」の取り組みに着目し、その理論的な構想と具体的な授業実践、そしてそれらに対する教授学的な批判を検討している。その結果、学校と生活を実践的な行為により結びつけるアプローチの限界を指摘している。第四章では、同時代の改革教育的な運動を教育政策の水準で促進したノルトライン・ヴェストファーレン州の枠組み構想「学校生活の形成と学校の解放」が検討対象として設定されている。そして、枠組み構想が策定されるまでの政策的な経緯が整理され、その下で行われた具体的な授業実践や、それらに対する批判の論理が明らかにされている。第五章で著者は、教授学者クラウス・プランゲの学校論を取り上げることで、前章までの改革教育的な授業改革に対する批判を踏まえた学校と授業の在り方について検討を行っている。そこでは、学校と生活を直接的に統合することの限界が、近代社会の複雑性や偶発性という点から指摘されており、また生活との差異に基づく「反省的学習」の促しが、そうした社会構造下では学校と生活の接続に寄与することが示唆されている。

第三部第六章で著者は、生活との差異に基づく授業の構想と実践の典型的な事例として、1990年代以降の旧東ドイツ地域における改革教育の復古運動に着目している。そして、テューリンゲン州で実施された学校実験「イエナ・プラン・ヴァイマール」を検討の対象とすることで、改革教育的な学校と生活の直接的な接続を乗り越えた授業のあり方を考察している。そこでは、イエナ・プランに典型的な学校と生活の統合の問題点が批判的に検証され、その代わりに現実を複数の眼差しから観察する「多視点的授業」と、視点同士を結びつける「対話的教育」の教授学原理、そしてそれらに基づく授業実践の内容が明らかにされている。第七章では、こうした学校実験の成果をさらに発展させた「ヨーロッパ・プロジェクト」の取り組みが取り上げられ、多視点的授業の理論的な構想と複数の授業実践が検討されている。それを踏まえて著者は、授業の中で生活に対する多視点的な観察を促すための「多視点的モデル」を提示している。

終章で著者は、本論文で明らかになったことを整理するとともに、そこから学校と生活の接続問題に対する研究の示唆をまとめており、学校と生活の接続を果たす授業の理論モデルとして「反省的・多視点的授業の構成理論」を示している。そして、本論文で浮き彫りとなったさらなる検討課題を指摘している。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

田中怜氏の論文は、学校と生活の接続という教育学や教育方法学において長年問われてきた問題に、ドイツの改革教育的な学校・授業改革に関する丹念な資料の読み込みと精緻な分析に基づいて取り組んでいる。特に生活との直接的な統合を要請する従来の改革教育的な学校論や授業論に対して、生活との差異に基づく反省的・多視点的な授業の構成理論を提示している点、またそれを通して従来の教育方法学研究における改革教育の是認的な評価を乗り越えている点で、論文の独創性を評価することができる。さらに改革教育の伝統的な問題設定を、現代の資質・能力論と結びつけて論じている点も、今後の教育方法学研究にとって有意義であると高く評価することができる。

令和2年1月15日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。